夏目漱石の戦争観に対する一考察

－『趣味の遺伝』を中心として －

夫伯 *
poe21@hotmail.com

Contents

Ⅰ. 序論
Ⅱ. 戦争を語る主人公の性質の設定
Ⅲ. 戦争の暗部を露呈するプロットの様相
Ⅳ. 女性遺族の悲哀のモチーフの造形
Ⅴ. 結論

Abstract

夏目漱石の『趣味の遺伝』は日露戦争後の凱旋があった時期に書かれた作品であり、戦争や戦勝に対する叙述が多い。一方、この作品は主人公がその名利欲から過去の研究業績について小説めいたことを書いているという設定が取られている。即ち本作品は主人公であり語り手である主人公がこうした過去の体験を書いている過程であり、主人公には戦争文学を書こうという目的や意識はない。

しかしながら、作品外部の作者が作品内部の作家に作中世界を書かせているという形態のこうした作品においても、主人公の性質やプロットやモチーフの設定・構築に、実際の作者漱石の戦争を観る洞察や目論みが反映されている。作外の作者によって書かれていることを前提に『趣味の遺伝』を精読する限りでは、主人公の性質設定ができる限り基調とされながら構築されていく戦争の暗部を露呈するプロットの様相や、またさらに戦勝と女性遺族に纏わる統一的なモチーフの造形が把捉され、彼女らによる悲哀の表象が解読されるのである。

文学の研究方法論として、作者をはじめとする作品外部の状況を援用せずに、作品内部の事象それ自体の考察に重きを置き作品の性格を求めようとする立場があるが、本稿はそうした方法や立場に依拠する論考ではない。作中世界における主人公の性質設定・プロットの様相・モチーフの造形に関わる作者の意図や作意の考察を重ねて、作者による戦争への見解や視座を探究することを試みた論である。

Key Words ： 夏目漱石、『趣味の遺伝』、日露戦争直後、戦争文學、女性遺族，悲哀
(Natsume Soseki,『Shuminoiden』, Right after Russo-Japanese War,

＊ 慶熙大学校文化観光コンテンツ学科教授、日本近代文学専攻。

교보문고 KYOBO Book Centre

War-literature, the Berebed women, Grief)

Ⅰ. 序論

夏目漱石(1867~1916)の『趣味の遺伝』は、1906(明治39)年の1月10日発行の雑誌『帝国文学』に掲載されている。この作品は漱石の初期の短編作品であり、1905年(明治38)12月4日から12月11日まで、丁度８日間に書き上げられた。24行24字詰めの原稿紙にして64枚の分量である。[1)]

『趣味の遺伝』の作品世界に設定された時代背景は、作者である漱石がこの作品を執筆していた頃の時期と一致する日露戦争後の凱旋があった時分であり、この作品には戦争や戦勝に対する叙述が多い。また、作中では<余>と名乗る主人公が、先祖の恋愛感情が子孫にも伝わるという趣味の遺伝理論の研究業績をなした当時の体験記を書いているという設定が取られており、即ちこの作品は主人公であり語り手である<余>がかような「過去の体験を書いている過程である」[2)]。

しかし、漱石と<余>は別途の存在であり、この作品は漱石による私小説ではない。事実、漱石は過去に「趣味の遺伝と云ふ理論」(197)[3)]を考案したことなどはない。『趣味の遺伝』の世界はあくまでも作者夏目漱石に書かれたフィクションなのである。

だが、『趣味の遺伝』のように、作品外部の作者が作品内部の作家に作中世界を書かせているという形態のこの作品においても、主人公の性質やプロットやモチーフの設定・構築に、作品外部の作者の見解や目論みや意図が当然反映されるものである。

これまで諸家は、『趣味の遺伝』に、特異な主人公の性質設定や紆余曲折するプロットや複数のモチーフの様相があるとし、「主題の分裂」[4)]があることを指摘

1) 小宮豊隆(1975)『漱石の芸術』岩波書店、p.62。
2) 夫伯(2010)「夏目漱石の『趣味の遺伝』の構造に対する一考察」『日本思想』18, 韓国日本思想史学会、p.244。
3) テキストは、夏目漱石(1979)『漱石全集』第３巻 岩波書店収載の「趣味の遺伝」を使用し、本文の引用出処はページ数だけを 記載することにする。
4) 大岡昇平(1974)「漱石と国家意識－『趣味の遺伝』をめぐって－」『大岡昇平全集』第13巻、中央

교보문고 KYOBO Book Centre

したり、「決して、起承転結の見事な、短編の傑作とは言い難い」[5]等と指弾してきている。

作中の作家である主人公を中心に考えるならば、この作品の主題性は曖昧であり結構の完成度も貧弱であるのかも知れない。しかしながら、作外の作者によって書かれていることを前提に『趣味の遺伝』を精読する限りでは、本作品には主人公の性質設定ができる限りに基調とされながら構築されていく一貫性を帯びたプロットとモチーフの造形が把捉され、それらは漱石の考える戦争にたずさわる見地・見識を提示しようとする作意をもって造型されたものとして考察される。

文学の研究方法論として、作者をはじめとする作品外部の状況を援用せずに、作品内部の事象それ自体の考察に重きを置き作品の性格を求めようとする立場があるが、本稿はそうした方法や立場に依拠する論考ではない。作中世界における「主人公の性質設定」,「プロットの様相」,「モチーフの造形」に関わる作者の意図や作意の考察を重ねて、作者による戦争への見解や視座を探究することを試みた論である。[6]

Ⅱ．戦争を語る主人公の性質の設定

序論で述べたように、『趣味の遺伝』では主人公が語り手として設定されており、つまり漱石が主人によるナレーションを通じて叙述を行っている。またさら

公論社、p.81。

5) 斎藤恵子(1973)「『趣味の遺伝』の世界」『比較文学研究』24、東大比較文学会、p.102。

6) 韓国における漱石研究の広がりにおいて、それは例えば金正勲氏が「韓国での漱石研究には、漱石の植民地主義を批判的な見地から厳しく非難し、彼を国家主義的枠内から離れなかった帝国主義者と捉える意見と、漱石と彼の作品に対して肯定的視線で積極的に需要しようとする主張が両立している」(2010)、『漱石と朝鮮』中央大学出版部、p.173)と指摘しているように、漱石と植民地主義に焦点をあてた研究、あるいは帝国主義や国家主義の関連研究は比較的進んでいるようである。しかしながら、論者が調べた限りでは、夏目漱石の戦争観それ自体を探究した論文は見あたらなかった。無論『趣味の遺伝』の一資料だけで漱石の戦争観の総体を図ることはできないが、こうした研究が我が国の漱石研究に一助できることは確かであると言えよう。

교보문고 KYOBO Book Centre

に、ここに、一種特殊な構造が仕組まれているのだが、これについては、後述が本節の理解を容易にすると思われるので、最初に冒頭文及び冒頭部触れて行くことにする。

『趣味の遺伝』の冒頭は、主人公の行う、「詩想」(152)によって始められている。それは戦場における殺戮を子細に描出するものであり、狂暴な猛犬の群れが出陣した兵士たちの肉を喰い骨をも食る。

> 「人をほ屠りて餓えたる犬を救へ」と雲の裡より叫ぶ聲が、逆しまに日本海を動かして満州の果迄響き渡つた時、日人と露人ははつと應へて百里に餘る一大屠場を朔北の野に開いた。すると渺々たる平原の盡くる下より、眼にあまる獒狗の群が、腥き風を横に截り縦に裂いて、四つ足の銃丸を一度に打ち出した様に飛んで來た(中略)やがてめりめりと腕を食い切る、深い口をあけて耳の根迄胴にかぶり付く。一つの脛を銜へて左右から引き合ふ(中略)牙を鳴して骨にかかる。ある者は挫いて髄を吸ひ、ある者は碎いて地に塗る(p.151)。

「日人と露人ははつと應へて百里に餘る一大屠場を朔北の野に開いた」、即ち日露戦争である。であるが、日本の兵士らがロシアの兵士らを惨殺している訳でもなければ、その逆でもない。ここには、敵・味方の区別がない。日本とロシアの両兵士は猛犬によって屠殺される対象である。それでは、日露の両兵士らを虐殺する「獒狗」とは、一体なにを示唆するものなのであろうか。

日露戦争に対するこうした観点は、主流ではなかったものの、社会主義の反戦運動を展開する『平民新聞』[7]を通じて、既に当時の日本の社会に知られていた。例えば、同新聞によって主張された次のような一節は「詩想」のコンセプトに近接するものであると言える。

> 諸君、今や人を殺さんがために行く、否らざればすなわち人に殺されんがために行く(中略)諸君の行くは諸君の罪にあらざるなり、英霊なる人生を強いて自動機械

7)『万朝報』(日刊紙・1892年11月1日創刊)が日露戦争の開戦論に転じたのを機に、反戦の意思を貫くために退社した幸徳秋水・堺利彦が、1903年11月15日に東京で創刊した週刊新聞。社会主義・平和主義を唱えた。

교보문고 KYOBO Book Centre

> となせる現時の社会制度の罪なり(中略)露国の兵士もまた人の子なり、人の夫なり、人の父なり、諸君の同胞なる人類なり。[8)]

ここで『平民新聞』が主張する「現時の社会制度」とは、国家主義であり帝国主義であることは言うまでもない。漱石は日露の両兵士を虐殺する敵を「獒狗」と抽象表現し、かようには表現していない。おそらくそう感じてはいながらも、そこまでは明確には表現も賛同したくなかったものと思われる。しかしながら、戦争における本質的な敵は露西亜ではなく別に存在しているという、同時代的なコンセプトの疑似から、『趣味の遺伝』冒頭の「詩想」に日本の初期社会主義反戦運動との相似性を指摘し得る。また、「詩想」直後には、「平生戦争の事は新聞で読まんでもない、又其状況は詩的に想像せんでもない」(p.155)という叙述もある。つまりこれは、漱石による真の敵が別途存在する敵味方の区別のない戦場という視点の発想が、『平民新聞』の上記のような内容が認識された上で制作されたことを示唆する一文でもあるとも言える。

さて、『趣味の遺伝』の冒頭がこのように始められていることから、漱石がこの作品を戦争と関連させようとしていたこと、さらにはこの作品を通じて戦争と関連する何らかの見解を世に知らせようとしていたことが容易に想起される。こう考えることは、かように「詩想」に耽けりながら歩行する主人公が友人と待ち合わせた新橋駅で偶然に「凱旋」(p.152)を歓迎する群衆に出くわすという設定を見ても正しいのであろう。しかも、続く叙述では、凱旋場での様子が詳細に記述され、待ち合わせたはずの友人との約束の話は最後まで登場せずに、第1章が終了する。3章からなる『趣味の遺伝』の、第1章において戦争に対する想像・書かれずに終る友人との約束・凱旋場での子細な情況の話で終了する叙述の状況は、漱石が戦争直後の戦勝と関連する創作を目指していたことを如実に物語っている。

実際、『趣味の遺伝』は戦争文学、即ち戦争を題材とし戦争と関わるテーマ性を提示する小説[9)]として理解されるほど[10)]、戦争について多くのことが叙述され

8)『平民新聞』第14号、1904年2月14日。
9) 他、戦争文学について「直接に戦争を題材とするもの、戦闘場面を描いているもの、戦場が舞

교보문고 KYOBO Book Centre

ている。

だが、『趣味の遺伝』は、中心人物とナレーターを兼備する主人公の、特異な性質が故に、戦争と関連する話が一貫してはいながらも、戦争文学のカテゴリーから外れたような作品として認識させる一面も帯びている[11]。以下、主人公の性質の主要な特徴について、確認してみることにする。

まず、主人公は戦争に対して鋭敏で鋭利な感性を持つ人物である。それは先に挙げた冒頭の「詩想」の叙述にも明らかであるが、凱旋する将軍の姿を見て満州の広野を必死の心境で突進する兵士らの喚声や状況を連想したり、凱旋の軍曹とその老母の再会の様子に、戦死した友人浩さんとその老母を想うことを忘れない人物である。またさらに、亡友浩さんの戦死の情況を克明に想像することのできる能力を備えた人物でもある。

そして、主人公は戦勝の国民的な雰囲気には関心のない人物という設定で登場している。この点については、先に触れた、兵士らが殺戮される戦場を「詩想」をしたりしながらも国民的な行事である凱旋があることを知らずに新橋の駅で友人と約束をして偶然に凱旋歓迎の群衆に出くわすという一節によく示されている。かような程に主人公の戦争についての関心は戦争に勝利した事などではないのである。漱石は『趣味の遺伝』の冒頭部の主人公が偶然に凱旋の状況と遭遇するという設定に、戦勝に纏わる物語を創作していこうとする複線とこのような主人公の性質の二重の意味を含蓄させている。また、主人公の国民的な戦勝の雰囲気との乖離性は、凱旋場において戦勝を喜ぶことよりも亡友やその老母を想うという反応にもよく表われている。

さらに、主人公に付与されている最も強い性質は社会的な名声欲である。『趣味

台であるもの、軍隊・軍人を中心として描いているもの、銃後が舞台であっても戦争を中心に据えたもの、あるいはそれらに類するもの」という定義もある（有山大五(2000)「戦争文学論」―<戦争文学>とその研究辺の一視点」『芸術至上主義文芸』26、芸術至上主義文芸会、p.8)。

10) 大岡昇平氏もこうした側面から『趣味の遺伝』を把握しようとする立場であり、「私などは戦争文学といってもいい」と指摘している(大岡昇平、前掲書、p.80参照)。

11)『趣味の遺伝』は研究の始められた初期から超自然的な恋愛を描いた作品と位置づける動向がある。その系譜として、小宮豊隆氏による「解説」(1956.8)、『漱石全集』岩波書店、pp.334-335参照)や越智治雄氏の「漱石の初期短編(承前)」(1970)、『国文学解釈と教材の研究』学灯社、p.32参照)、秋山公男氏の「『様虚集』の基層」(1992)、『愛知大学文学論叢』愛知大学文学会、p.28参照)などがある。

교보문고 KYOBO Book Centre

の遺伝』はその欲求によって冒頭から主人公が執筆しているという設定になっており、彼は「目下研究の学問に対して尤も興味ある材料を給與」(p.192)する「大発明をして学界に貢献しやう」(p.194)としていた時節、即ち「趣味の遺伝理論」を以て神秘的な愛の関係を当時の過去の出来事をもとに「小説めいた事を長々しくかいて」(p.199)いる。つまり言えば、この作品は、作家を真似たアマチュアが名利を目的に小説のようなものを書き上げて行くことを内容とした小説なのである。

したがって、自己の過去の業績を小説化して世に知らせようと目論む、作中の書き手の主人公は、戦争について多くを語りながらも、その脳裏には、漱石とは異なり、戦勝に纏わる物語を書き上げようとする意識はない。それは例えば、上に指摘したように、『趣味の遺伝』冒頭部の凱旋を歓迎する状況の登場は、漱石にとっては戦勝に纏わる物語を創作していこうとする複線であっても、主人公の次元においては全くそうなのではなく、彼にとっては実際にあった過去の体験が時制的な順を追って記述されたものに過ぎないのである。『趣味の遺伝』では、特にこのような主人公の特異な性質設定が、戦争と関連する話が貫かれながらも、戦争文学のカテゴリーからずれたような作品として看取させる趣きを生んでいる。

Ⅲ．戦争の暗部を露呈するプロットの様相

前節に考察した性質設定の、主人公<余>によって書かかれているという作風の『趣味の遺伝』は、戦争の残酷や悲惨について多々叙述されながらも、そうした展開が屈折するかのような様相をみせている。しかながら、その節々に依然として戦勝や戦争の暗部を提示しようとする作者漱石の意図が目立っており、また屈折の様相が漱石の作意によって統制されるという様態も認められる。本節では、まずはこの作品の話の流れをを20のプロットに綿密に把握し、こうした諸相の考察を試みる。

【第１章】

[1]主人公が、日本とロシアの両兵士が猛犬の群れに惨殺される戦場の様相を、

교보문고 KYOBO Book Centre

子細に詩想するという状況

[2]こう想像して歩く主人公が友人との約束のある新橋駅で凱旋を歓迎する群衆に出くわすという状況

[3]凱旋場で将軍が行進する姿と万歳の歓呼の声に、満州の曠野を命懸けで突進する兵士らの喚声や状況を連想するという状況。

[4]そうした兵士らの死ぬか生きるかの必死の思いが崇高に感じられて、涼しい涙を流したとい状況

[5]凱旋の軍曹とその老母が再会に喜ぶ様子に、戦死した友人浩さんと彼の老母のことを想起するという状況

【 第2章 】

[6]自宅に戻った主人公が、浩さんや兵士たちの悲惨な戦闘と塹壕での惨死の状況を、詳細かつ写実的に想像するという状況。

[7]主人公が、可哀想なのは戦死した亡友より残された老母であると思い、老母が一人息子を失ったことを哀しみまた嫁をほしがり、苦痛に暮らしていることを思い出すという状況。

[8]亡友の老母を慰めに行こうと思い、先達て訪問した時にせめて気立ての良い嫁でもいたらと泣き付かれたこと、亡友の戦場日記をぜひ読んでほしいと頼まれことを思い出すが、結局は応対に困るので慰問を見合わせるという状況。

[9]亡友の墓参りを思い付き、寂光院を訪ねたところ、亡友の墓に豆菊の花束を手向ける美しい若い女を目撃し、その女の絵画的な美しさが子細に詳述されるという状況。

[10]その謎の女と亡友との関係が無性に知りたくなり、後を追うが見つからないので、亡友の老母に会って訪ねることにするという状況。

【 第3章 】

[11]亡友の老母の家を訪れ、豆菊を亡友が好きだったということを知り、訪問する度に老母が嫁があったらばとこぼすことを怪訝に思い、老母の話から亡友に恋人がいなかったことが分かり、亡友と謎の女との関係を知るために日記を借り出すという状況。

[12]帰宅の途中に謎の女を乗せた人力車白山方面に向かうのを見掛け追いかけようとするがまたもや見逃すという状況。

[13]帰宅後、戦場での苛酷な勤務状況・一度郵便局で見掛けた女の夢を3度も見たということ・同僚の死や中隊の全滅や攻囲軍の大量な死・自身の死を

교보문고 KYOBO Book Centre

待つ悲惨な心境が書かれている亡友の日記を読み、これを読んだであろう老母が嫁を欲しがる事情に納得し、また日記が突撃を前に老母を想う一句でがぷつりと切れていることにぞっとして日記を閉じるという状況。

[14]その晩、さらに謎の女の事が気になって安眠できず、その後３日間、謎の女の正体をつきとめようと白山方面や寂光院を探索するが全く糸口がつかめないという状況。

[15]その３日後の晩に、研究中の遺伝学の書物を読む中で、祖先の恋愛感情が子孫に遺伝するという趣味の遺伝理論を思い付き、これを以てこの難題が解ければ、目下研究中の学問に対して貴重な事例を提供する貢献になると思い気分が爽快になるという状況。

[16]翌日学校の同僚をつてに、亡友と謎の女の祖先との関係を知っていそうな旧紀州藩の家令という老人の存在を探しあてるという状況。またその老人との面談の前夜、遺伝学を応用し趣味の遺伝という理論を思い付いた自身の才能に陶酔するという状況。

[17]大発明をして学界に貢献しようという態度で老人を訪ね、亡友とよく似た亡友の祖父と白山の方に住む小野田博士の祖先の間に実らぬ恋愛があったこと、その祖先が小野田の妹とよく似ているということ、また亡友と小野田の妹の間に面識がないことを知り、「趣味の遺伝と云ふ理論を証拠立てるに完全な例ができた」(p.197)と安心するという状況。[12)]

[18]「是からの話は端折つて簡略に述べる」(p.198)「新橋で軍隊の歓迎を見て、其感慨から浩さんの事を追想して、夫から寂光院の不可思議な現象に逢つて其現象が学問上から考へて相等の説明がつくと云ふ道行が読者の心に合点できれば此一遍の主意は済んだのである」(p.199)というこの話を叙述して来た動機と目的が明示される状況。

また、「ここ迄書いて來たらもういやになつた(中略)学期試験も近づくし、夫

12) 実際は、亡友浩さんの祖父と博士・妹の祖父の間に実らぬ恋愛があったこと、亡友とその祖父がよく似ていてまた博士の妹とその祖先がよく似ていること、亡友と博士の妹の間に面識がないこと、博士の妹が白山方面に住んでいること、というファクターを認識しただけでは、亡友の寂光院の墓に白菊を手向けた女と、亡友が郵便局で見掛けただけなのに戦場で３度も夢に見たという女が、一致する可能性が高いだけで、先祖の恋愛感情が子孫に遺伝する「趣味の遺伝と云ふ理論を証拠立てるに完全な例ができた」とは言えない。
主人公が博士の妹と直接面談して寂光院で見た女であることを確認し、さらに女も郵便局で浩さんを見掛けたことがあったのかということが検証されてこそ「完全な例ができた」と判断できるのである。

교보문고 KYOBO Book Centre

に例の遺伝説を研究しなくてはならん(中略)元来が寂光院事件の説明が此篇の骨子だから、斯くの事ここ迄筆が運んで来て、もういいと安心したら、急にがつかりして書き續ける元気がなくなつた」(p.199)という事情で書き続ける気力が失せたということが叙述されるという状況。

[19]その後、同僚から小野田博士の紹介を受けたこと、妹とも面会したところやはり寂光院の謎の女であったこと、淋しく暮らす亡友の老母の慰労を理由に妹と老母の交流を博士に依頼し承諾を得たこと、交流の中で妹が「丸で御嫁さんの様になつた」(p.200)なったこと、が彼女に浩さんの日記を見せると「それだから私は御寺参をして居りました」(p.200)と答え、なぜ墓に白菊を捧げたのかと尋ねると「白菊が一番好きから」(p.200)と述　べたという過程がごく簡略に叙述されるという状況。

[20]小説の終結部が「余は色の黒い將軍を見た。婆さんがぶら下る軍曹を見た。ワーと云ふ歓迎の聲を聞いた。さうして涙を流した。浩さんは塹壕からあがつて來ない。誰も浩さんを迎えに出たものはいない。天下に浩さんの事を思つて居るものは此御母さんと此御嬢さん許りであらう。余は此兩人の睦まじき様を目撃する度に、将軍を見た時よりも、軍曹を見た時よりも、清き涼しき涙を流す。博士は何も知らぬらしい」(p.200)という内容で結ばれるという状況。

『趣味の遺伝』の書き出しつまり第１章の冒頭が戦場における兵士らの殺戮を告げる「詩想」をもって始められていることは既に述べたが、この作品は上掲の[6]に明らかであるように、第２章の冒頭も兵士らの悲惨な戦闘の想像をもって始められている。しかも、その叙述は詳細かつ写実的で実に長い。

蛇の塀をわたる様に頭から尾迄波を打つて然も全体が全体として漸々上へ上へと登つて行く(中略)もう塁壁を攀じ上がるだらうと思ふうち、忽ち長い蛇の頭はぽつりと二三寸切れてなくなつた。是は不思議だ。丸を喰つて倒れたとも見えない。狙撃を避ける為地に寝たとも見えない。どうしたのだらう。すると頭の切れた蛇が又二三寸ぷつりと消えてなくなつた。是は妙だと眺めて居ると、順繰りに下から押し上がる同勢が同じ所へ来るや否や忽ちなくなる。しかも砦の壁には誰一人としてとり付いたものがない、塹壕だ(中略)塹壕に飛び込んだものは向へ渡す為に飛び込んだのではない。死ぬために飛び込んだのである。彼等の足が壕底に着くや否や穹

교보문고 KYOBO Book Centre

> 窖より覗を定めて打ち出す機關砲は杖を引いて竹垣の側面を走らす時の音がして瞬く間に彼等を射殺した。殺されたものが這上がれる筈がない(pp.164~166)。

兵士らが列を成し蛇が塀を渡るように斜面を進んでいく。ところが塁壁を攀じ登ろうとすると、蛇の頭ような部位が二三寸ぷつりと消失しまう。塁壁と兵士らの軍列の間に塹壕があるからである。主人公は遠方から記録するかのように叙述している。塹壕に飛び込むと高方から機関銃が杖の先で竹垣の側面を打ち走らす時のような音を立てて瞬く間に彼等を射殺し、殺されたものが塹壕を這上がれる筈もないのである。『趣味の遺伝』では、上記のような写実性に富んだ子細な筆致で、兵士らが惨死した死体の形相までが綴られ、こうした悲惨な兵士らの進軍についての叙述はテキストの全体量49ページのうちの6ページをも占めている。[13)]

第1章の冒頭部において主人公の戦争に対する鋭敏で鋭利な性質が示唆されているので、彼がこのような現実性に富んだ想像を成しうるのは順当なことであると言える。主人公は戦争の悲惨を伝える作品を書こうとしているのではなく過去に自身が想像したことを書き連ねているのである。しかし、3章立てのうちの第1章及び第2章の冒頭におけるこの手の叙述設定には、漱石が戦争のもたらす悲惨や残酷さを読み手に伝えようとしていた意欲が明瞭であると言っても過言ではない。

また、このような意図ある態度は、3章の[11]から[13]にかけての戦場日記の導入にもよく表われている。ここでは、主人公は亡友浩さんと謎の女との関係が知りたくて亡友の老母から日記を借り出して読むのだが、その内容には亡友が密かに想う女性がいたとういうことが記されているだけではなく現実の戦場での極めて苛酷な状況や悲痛な心境も多く刻まれている。それに対して主人公はぞっとして日記を閉じるという反応のみを示すだけで、頭の中は女の正体をつきとめたいという思いでいっぱいである。しかしながら、漱石はこうした手法で、戦争のもたらす悲惨や残酷を、主人公により想像された以上のさらなるリアリ

13) 本稿が使用するテキスト(夏目漱石(1979) 「趣味の遺伝」『漱石全集 』第3巻、岩波書店)を基準とする。

교보문고 KYOBO Book Centre

ティ－を以て、提示することに成功している。この作品が漱石に書かれていることを重視すると、戦場日記の導入にもやはり、隠れた目論見のあることが把捉されるのである。

それでは、かようにして戦争が包摂する間然を提示・伝達することに緻密な漱石は、何故ゆえ戦勝に纏わる小説の中に祖先の恋愛感情が子孫にも遺伝するという趣味の遺伝の話を取り入れたのだろうか。こうした神秘的な愛の話は戦争を題材としない小説設定でも書けたはずである。

漱石が神秘的な愛の話を導入させた理由は、前掲のこの作品のプロットを次のようにさらに過程化することによって瞭然とする。

殺戮戦争の詩想 ⇒ 戦勝凱旋との遭遇 ⇒ 戦闘兵士の必死の思いの連想
⇒ 亡友とその老母の悲哀に対する想起 ⇒ 亡友の悲惨な戦闘と戦死状況の想像
⇒ 亡友の老母の苦痛に対する思慮 ⇒ 亡友を思慕する若い女との邂逅
⇒ 女の正体に対する解明欲の発動 ⇒ 解明欲から亡友の戦場日記を確認
⇒ 解明欲から趣味の遺伝理論を考案 ⇒ 亡友を思慕する女の正体を解明
（ ここから端折って書くと明言され、省略調で、簡略に叙述される ）
⇒ 亡友の老母と嫁のようになった女との交流 ⇒ その風景による戦争観の深化

もとより戦争に対して鋭敏・鋭利な性質を持つ主人公は、戦勝凱旋との遭遇を契機に亡友が悲惨に戦死して行ったことを思慮するようになり、それと平行して次第に亡友の老母の苦痛を深く慮るようになる。ところがそんなところへ寂光院の墓で亡友を思慕する若い女と邂逅し、そこからその女の正体を解明することのみに囚われ、その解明欲からついには祖先の恋愛感情が子孫に遺伝するという趣味の遺伝理論を考案し、その理論を以て女の正体を解明することに成功する。その結果亡友を思慕する女と苦痛の母親となり、女はまた「まるで御嫁さんの様」になり、その交流の風景に主人公の戦争観は深化する。要するに、このような過程に介在する神秘的な愛に纏わる趣味の遺伝のプロセスは、結局は、戦死した亡友を思慕する女と戦争で息子を失った苦痛の母親が結び付けられて行く様相が導出される、即ち提示される、意図ある仕組みとなっているのであ

교보문고 KYOBO Book Centre

る。

またさらに、『趣味の遺伝』の終焉部[19][20]においては、漱石による作意の表出が実に露骨である。終焉部直前の[18]において、主人公は、趣味の遺伝の理論で女の正体が解明されたようなので書くことのモチベーションが減退しまた非常に多忙なので「是からの話は端折つて簡略に述べる」と宣言している。したがって、その後の１ページ半の程度の叙述[14]の中で、[19]に見るように神秘的な愛の話の結末が抽象的に至極簡略に処理されることは妥当であるとも言えるのだが、冒頭部の戦勝凱旋の内容と関わる終結部[22]が設定されるのは実に不自然である。言い換えれば、自身の理論で神秘的な愛の関係を解明したという体験記を書くことを目的とする主人公が、その絶頂を書き上げた上に多忙であるという理由から、終焉部に至って書き続ける意欲が落ちたならば、少なくとも神秘的な相思相愛の事象を最大限肉付けして終わるか[15]、互いに惹かれあっていたという抽象的な愛の結末だけで終了してこそ自然な完成感が保たれるのだが、かようには書かれないことに加え、冒頭部の凱旋の内容と連なる重い結論が設定される情況に、戦勝の隠微に纏わる作品を書き上げようとする漱石の作意が露骨に顔を出しているのである。

実際、この終焉部を書く時期に漱石は非常に多忙であり、『趣味の遺伝』を書き終えると直ちに連載中の『吾輩は猫である』の第7章の執筆に取り掛かっている。[16]この当時の『趣味の遺伝』脱稿直後の書簡には、「実はもつとかかんといけないが時が出ないからあとを省略しました」[17]「あれは頗る比例といふ點から云つては丸駄目の作である。趣味の遺伝といふ趣味は男女相愛するといふ趣味の意味です」[18]などの悔恨が吐露されており、こうした反省は言うまでもなく『趣味の

14) 本稿が使用するテキストを基準とする。
15) 本来ならば、女も郵便局で浩さんを見掛けたこと、その時から浩さんと同様に夢に見るなど忘れられないこと、さらに重要なことは、少なくとも、どのようにして浩さんの墓が寂光院にあり、また寂光院の中の墓の位置まで分かったのかということが書かれなければならないはずである。
16) 漱石は『趣味の遺伝』を1905年12月４日から11日にかけて書いたものである。作家として名が高くなり始め多忙な時期であり、翌12日から17日までは『吾輩は猫である』の第７章と第８章を書いている(斎藤恵子 前掲書、p.102 参照)。
17) 夏目漱石(1980)「1905年 12月11日 書簡」『漱石全集』第37巻、岩波書店、p.282。
18) 夏目漱石(1980)「1906年 ２月13日 書簡」『漱石全集』第38巻、岩波書店、p.20。

교보문고 KYOBO Book Centre

遺伝』の終焉部を指すものである。つまり漱石は時間に追われ神秘的な愛の話の結末のほうを不自然に終らせてしまったことを事後に悔いてもいるのである。

『趣味の遺伝』は戦争のもたらす暗い様相を提示しようとする作者漱石の作意を以て書かれており、そうした意図はそのプロットの折々に解読される。他方、単純な戦争文学の形式ではなく、主人公が自身の考案した遺伝学的な理論で神秘的な関係を解明したという体験記の設定を巧みに生かしつつ小説的な魅力を加味しようとした趣向も見られるが[19]、結局は時間的な制限により終焉部において本来の作意が露骨に優先されることで、そうした趣きは不自然さをきたしている。要するに『趣味の遺伝』はそれほどまでに戦争の暗部を露呈しようと目論まれたプロットが遵守された作品なのである。

Ⅳ.女性遺族の悲哀のモチーフの造形

前述したように、戦争に鋭敏・鋭利な主人公は、兵士らが殺戮される戦場を詩想し、将軍と兵士らの凱旋と遭遇し、満州の戦場での必死の突撃の喚声を連想して感涙する。また戦死した亡友とその母親を思いだし、亡友が悲惨に戦死して行く様相を想像し、次第に亡友の母の苦痛を深く思慮するようになる。ところが寂光院の墓で亡友を思慕する若い女と邂逅した後、亡友と謎の女の関係が無性に気にかかり、亡友の戦場日記を読む。さらに両者の関係を解明することのみに囚われたあげく、趣味の遺伝理論を考案し女の正体を解明することに成功する。

その結果亡友を思慕する女と亡友の苦痛の老母との出会いが成立し、女は嫁のようになり、その交流の風景に、将軍や兵士らの凱旋を見た時よりも感涙する。

---

19) 小説家でもある大岡昇平氏も、主人公が寂光院の墓で見知らぬ女と邂逅する状況、即ち主人公が自身の遺伝学的な理論で神秘的な関係を愛の解明したという体験記が本格化する時点から「『趣味の遺伝』はこの部分から、いわゆる小説的興味が出てくる」と読んでいる(大岡昇平、前掲書、p.86参照)。

교보문고 KYOBO Book Centre

漱石に書かれた『趣味の遺伝』はこのような過程を提示する話である。<即ちこの作品には,「凱旋と戦死者の悲惨」,「神秘的な愛の関係」,「女性遺族の悲哀の」といった 複数のモチーフがある。

しかしながら、『趣味の遺伝』の主柱を成すのは女性遺族の悲哀モチーフである。こう言い切れるのは、このモチーフが終焉部の位相を保ちこの作品の結論となる結末として位置づけられているという理由だけではない。この作品の内容を綿密に見れば、既に前半部にこの結末に向かう戦死した亡友の老母の想起さらには息子の死を哀しみ嫁を欲しがるその老母の苦痛への思慮という複線の叙述があり、主人公による冒頭部での戦争の詩想や凱旋との遭遇も言うならばこの複線を導き出すための作者による布石であったと言える。そして、中盤部において戦争の深刻さからはそれていくような趣味の遺伝の神秘的な愛の話の中でも、主人公が亡友の戦場日記を読むことで老母が嫁を欲しがる事情に納得し、また日記がその老母を想う一句で途切れているなど、結末へと向かう複線が重ねて強調されている。またさらに、この神秘的な愛の話は亡友を思慕する女が亡友の苦痛の母親に結びつけられて行く橋梁であり、かようにして成立した交流の中で女はまるで嫁のようになって行き、そうした風景に凱旋場で感銘した以上に深く感じ入るという、冒頭部の内容を継承する結末に到るのである。要するに『趣味の遺伝』を精察すると、戦勝の裏面にある女性遺族の悲哀への仁愛という、この作品を貫く主想の造形が定かなのである。

漱石によって書かれる『趣味の遺伝』は息子の戦死を哀しむ老母に戦死した息子を思慕する女性が付与されていく話であると言える。また老母と親しくなり「丸で御嫁さんの様になつた」彼女にも遺族のイメージが被せられていると見るのは深読みではなかろう。この作品の最後に語られるのは、市井の片隅で、戦争という理不尽な大剛によって愛する者を失った老母と嫁と看取るべき女が慰め合い僅かに幸せになるという悲哀への深淵な感涙である。こうした表象は戦勝の時代への諷刺であると同時に作者による戦争に対する人道的な批判の表われであると言っても過言ではないであろう。戦争は男性を戦場へと奪い、市井では特に取り残された老母と妻に、哀しみや悲惨が集約的に及ぼされるものである。『趣味の遺伝』の主想となる女性遺族のモチーフの根底にあるのも、やはり戦争に

교보문고 KYOBO Book Centre

よって愛する者を略奪された老母と嫁のような女のそうした悲哀である。

しかしながら、こうした社会的な弱者に対する視線や見解は、次に見るように、漱石が『趣味の遺伝』を書く以前から既に反戦主張の正当性を訴えるのモティーブひとつとして『平民新聞』に標榜されていたものでもあった。

> 平和撹乱より生ずる災禍に至りては、吾人平民はその全部を負担せしめらるべし(中略)諸君の老親はひとり門に寄り、諸君の妻児は空しく飢えに泣く。しかして諸君の生還はもとより期すべからざるなり。[20]

> 予備兵の後を或は痩せたる老母の悲しげに付き添ひ送り行く様(中略)夫が招集されて俄かに軍隊に入る事になつたので、もう七月八月といふお腹を抱えて泣きの涙で別れを告げようと思つて、はるばる出て来たさも、中々に会ふて心の丈を話さん暇もなき忙しさに、せめて夜中にでもと牛込箪笥町あたり陣営の門前を幾度となく行き帰るものあり(中略)牛込区の職工某は日給四十銭を取りて老母と二人其の日を送れるもなりしが、今回召集され、翌日より老母糊口に窮せり[21]

> 本郷の某村にて今回予備召集の命を受けたる者一人某は、妻が夫の召集を聞きて卒倒し遂に不帰の客となりし(中略)茨城県の或村より召集されし一兵士あり、彼れ召集に応じ行く途中に於て我家火を失せしと聞きしも帰らず、次で家と共に老母の焼死せしことを聞きしも帰らず[22]

本稿の第１節では冒頭では『趣味の遺伝』の冒頭となる「詩想」に叙述された、主た敵味方の区別がない、そいて真の敵が別途に存在する戦場の様相が、『平民新聞』の反戦の主張と疑似するものであることを考察したが、この作品の終結部に提示される、戦争に愛するものを奪われた市井の女性遺族の悲哀を焦点化する視線も、『平民新聞』の視座と近似するものである。さらに言えば、作品の冒頭と結末に見られるこのような宣揚的な情況に、漱石が当時の初期社会主義への関心を故意に暗示させていた感じも受ける。無論、漱石による視線は人道主義

20)『平民新聞』第14号、1904年２月14日。
21)『平民新聞』第14号、1904年２月14日。
22)『平民新聞』第16号、1904年２月28日。

교보문고 KYOBO Book Centre

に立脚するものとして見るべきなのであろうが、こうした同時代的な状況や、相似する叙述的な事象を確認してしまうと、果たしてその純然たる立地であったとは解し難い。少なくとも、漱石による戦争観が社会主義の影響を受けたものではなかったとしても、それと並列的な位相であったことは確かであると言えるであろう。

また、戦争文学としての性格を持つこの作品に、神秘的な愛のモチーフが介在したり、そうしたモチーフに見合う『趣味の遺伝』という題名がつけられたりするのは、当時の文壇批評の状況が強く意識されたからであるに違いない。それは例えば、廣津浪は「戦争を主題とした文学に傑作が出ない(中略)貧家の夫が出征するに望んで、その妻が髪を切つて賺けしたとか、親父が戦死したと云ふ号外を見て、其子は万歳を唱えたとか云ふような趣向に落ちてしまつて千篇一律になつてしまう」[23]と批判し、長谷川天渓は「戦争文学なる呼び声ありき(中略)多く平々凡々の作にして讀むに堪ゆる者少かりき。蓋し戦争文学といふも、其の意味甚だ空漠たり。吾人は斯くの如き文字が、文壇に残存するを好まざるなり」[24]と厳しく非難している。

こうした戦争文学批判の始まりは『明星』に発表された平山露花の「所謂戦争文學を排す」に始まっているが、文藝の内容から趣味を取ってしまえばそれは文藝ではないという批判の冒頭文で始まる、この文壇批評の次のような要点を確認すると、漱石はかなり露花による戦争文学の指弾點を意識していることが分かる。

> 文藝の内容より趣味を奪い去らば、之れ文藝なきなり(中略)普通の恋愛小説の舞台を戦場にし、男女の相愛を写す、之れ時代精神の描写か。近時の戦争小説なるもの、畢竟戦争を機会としたる一情話のみ、時代精神の描写と稱するが如き、理想や着眼や、何の頁においてか之を求むるを得む(中略)戦争は戦争なり、文学は文学なり、愛国は愛国なり、趣味は趣味なり、各其職分を異にし、其意義を異にす。[25]

23) 広津柳浪(1904.8)「社会主義と際物文学」『文芸倶楽部』第10巻11号、p.194。
24) 長谷川天渓(1904.12)「戦時の文壇」『文芸倶楽部』第10巻16号、p.246。
25) 平山露花(1904. 7)「所謂戦争文学を排す」『明星』第 6 号、pp.53-55。

교보문고 KYOBO Book Centre

露花が非難しているのは、現今の戦争文学というジャンルの小説には、戦争に題材を取った愛の話が単なる「情話」程度の話に留まり、文学に必ず必要な「趣味」つまり「時代精神」を薫陶する「理想や着眼」の「描写」等の興趣が欠けているという点である。

こうした批判の後に漱石は果敢にも『趣味の遺伝』という戦争文学を書いたのだが、それはどいう趣向の作品であっただろうか。名声欲の強い主人公が戦死した亡友と謎の女との神秘的な相愛の関係を自前の趣味の遺伝理論で解明したという体験記を書いているという設定であり、主人公には戦争文学など書くつもりはない。よって、過去体験の順序として戦場の悲惨や亡友の老母の苦痛なども多く書かれるが、神秘的な相愛の話が中盤部を占め、これは戦場を舞台とした単純な「情話」ではない。そして、本題となる先祖の趣味(恋愛感情)が子孫に伝わるという遺伝論による解明を以て、老母と亡友を思慕する女が結びつき、その結果として、女性遺族の悲哀に焦点をあてようとする「理想」的な「着眼」点が、戦勝の時代へのアイロニーとして、結末に描写されるという「趣味」の凝らされたものである。

またさらに、漱石は自身の手掛けた戦争文学にはかように「趣味」があるという、露花にあてつけた索引の意味から、「趣味」の語(但し漱石による意味付けは異なる)を小説名として採択したようでもある。

Ⅴ. 結論

本論での考察が多様かつ複雑なので、次のように比較的平易に整理して、結論とすることにする。

漱石は語り手である主人公のナレーションを通じて、叙述を行っている。主人公は、『趣味の遺伝』の冒頭部から、戦争に対して鋭敏かつ鋭利な性質、戦勝には関心のない性質の設定が見られる。また、主人公に最も強く設定された性質は社会的な名声欲であり、彼は自前の趣味の遺伝理論で神秘的な愛の関係を解

교보문고 KYOBO Book Centre

明したという過去の出来事を知らせるために小説めいたことを長々しく書いている。『趣味の遺伝』は特に主人公に付与された名利欲の設定が戦争文学の趣を軽減する方向に働いている。

漱石がこのように性質設定をした主人公の叙述をプロットに纏めさらに考察すると、**[第1章]** 兵士達が敵味方の区別なく猛犬に惨殺される戦場の様子を子細に詩想する主人公が、友人と待ち合わせた場所で戦勝凱旋の状況と遭遇し、戦勝の喜びよりも、将軍や兵士の凱旋に命懸けで突進する兵士らの状況や心境を連想して感涙し、また戦死した亡友とその老母を想起し、**[第2章]** その後、亡友が悲惨に戦死して行った状況を詳細に想像し、次第に亡友の母の苦痛を深く慮るようにもなり、そんなところへ亡友の墓で亡友を思慕する若い女と邂逅し、**[第3章]** その後、その女の正体を解明することのみに囚われたあげく亡友の戦場日記の内容を探り、さらにその解明欲から祖先の恋愛感情が子孫に遺伝するという趣味の遺伝理論を考案し、その理論を以て亡友を思慕する女の正体を解明することに成功し、**[終焉部]** その結果、女と老母との交流が成立し、女はまるで嫁ようになり、そうした風景に将軍や兵士らの凱旋を見た時よりも深く感涙する、という過程が把握される。

このような過程は、名利の小説化を目論む主人公のレベルでは過去の出来事を順々に列挙したものであり、主人公には戦争についての創作を行おうとする考えはない。しかしながら、漱石の次元を考えてみるならば、こうした枠組みを構築したこと自体が、戦争が包摂する間然を顕現させようとする意思の表われであると看取される。

実際、詳細に見ても、第１章の冒頭が敵味方の区別なく真の敵が別にいる戦場で兵士らが殺戮される子細な詩想で始まること／主人公が友人と待ち合わせた場所で偶然に戦勝凱旋の状況と偶然に出くわすこと／凱旋場では待ち合わせたの友人の話が全くなくして主人公が必死に突進する兵士らの様子を連想して感涙しまた戦死の亡友とその老母を想起すること／第１章のみならず２章の冒頭も亡友が悲惨に戦死していく詳細で写実的な想像で始まっていること／主人公が亡友を思慕する女の正体の解明欲に囚われ戦場日記を探ることでさらにリアリティーのある亡友の戦死への状況が裸出すること／主人公が趣味の遺伝理論

교보문고 KYOBO Book Centre

を考案して女の正体を解明することは結局は亡友を思慕する女と亡友の苦痛の老母が結び付けられて行く様相が提示される仕組みとなっていること、等々、戦争に起因する暗い様相を提示しようとする意図が折々に目論まれている。

特に、終焉部において、主人公は、創作の目的であった趣味の遺伝理論を以て女の正体を解明したという体験記の絶頂を書いたので動機が減退しまた多忙でもあるのでこの先は省略して書くと宣言しているのだが、こう述べた主人公が肝心の祖先の相愛感情の遺伝という神秘的な愛の話の結末を短く省略しつつ冒頭部の凱旋と通ずる内容を小説の結論に設定するという状況に、戦勝の隠微に纏わる作品を書き上げようとする漱石の作意が露骨に顔を出している。実際この終焉部を書く時期に漱石は非常に多忙であり、彼の書簡には時間に追われて神秘的な愛の関係の話の結末を不自然に終えてしまったことへの悔恨が吐露されている。要するに『趣味の遺伝』は漱石によりそれほどまでに戦争の暗部を露呈しようと目論まれたプロットが遵守された作品なのである。

また、さらに『趣味の遺伝』を綿密に精察すると、女性遺族の話がメインモチーフを織り成していることが分かる。前半部には、主人公が亡友の老母を想起し、また息子の死を哀しみ嫁を欲しがる老母の苦痛を思慮するという結末に向かう複線があり、冒頭部の主人公による戦場の詩想や戦勝凱旋との偶然なる遭遇もこの複線を導き出すための前複線であり、中盤部における戦争の深刻さからはそれていく神秘的な愛の関係の解明の話の中でもそこに導入された亡友の戦場日記の最後が老母を想う一句で途切れているなど結末へと向かう複線が重ねて強調されている。そして、神秘的な愛の関係の解明の話は結局は亡友を思慕する女が亡友の苦痛の老母に結びつけられて行く架橋であり、その結果両者の交流が成立し、女も、亡友の嫁のイメージ、即ち遺族の象徴を帯びて行く。さらに結末は戦勝の裏面にあるこうした遺族らの悲哀への仁愛という戦争表象の提示で終了する。つまり『趣味の遺伝』にはこの作品を貫く女性遺族に纏わる主想の造形が確かにあるのである。

漱石が冒頭から意図し、数々の複線を準備して最後に語るのは、市井の片隅で、戦争という不条理な力で愛する者を失った老母と「丸で御嫁さんの様になつた」女が慰め合い微かに幸せになるという悲哀に対する深淵な感涙であり、こう

교보문고 KYOBO Book Centre

した表象は戦勝の時代へのアイロニ-であると同時に戦争に対する人道的な批判の表われでもある。戦争は男性を戦場へと奪い、市井では特に取り残された老母と妻に、愛する者を奪われたが故の哀しみや苦痛が、集約的に及ぼされるものである。『趣味の遺伝』の主想となる女性遺族のモチーフの根底にあるのは、かような悲哀であるに違いないであろう。

しかしながら、『趣味の遺伝』の冒頭を飾る真の敵は別途に存在するという戦場の様相も当時の初期社会主義の反戦運動の旗手であった『平民新聞』の主張と通ずるものがあるのだが、このような戦争に愛する者を奪われた女性たちの悲哀や悲惨を深慮する視座もやはり『平民新聞』に標榜されていたものでもあった。無論、漱石による視線や見解は人道主義に立ったものとして評価すべきなのであろうが、こうした同時代性や近似する叙述的事象を確認してしまうと、果たして純然たるその立地であったのか論定し難い。漱石の戦争観が社会主義の影響によるものではなかったとしても、並列的な位相であったことは確かなのである。

さらにまた、漱石がこのような戦争小説に、神秘的な愛の話を介在させたり、それに合わせて『趣味の遺伝』と題名づけたりするのは、戦争文学を非難する当時の文壇批評の状況が強く意識されたからであり、特に平山露花が、戦争文学に対し、恋愛の話が単なる「情話」程度の話に留まり、「趣味」つまり「時代精神」を薫陶する「理想や着眼」の「描写」等が欠けていると指弾していたからである。したがって漱石は『趣味の遺伝』において、神秘的な相愛の話を導入し、戦死者の老母と嫁に等しい女に象徴される女性遺族の悲哀をフォーカスするという、即ち戦勝の時代への「理想」的な「着眼」点を結末に具象するという「趣味」を凝らし、尚且つ露花に向けた索引の意味から「趣味」の語(但し漱石による意味付けは相愛)を小説名に採択したようなのである。

『趣味の遺伝』を中心に漱石の戦争観を探究することを通じて、初期の社会主義との差別性を含め、漱石が日露戦争自体をどう観ていたのかという研究的関心が生まれた。今後、今回の戦争観の探究の結果を生かしつつ、こうした方向に向けて漱石の研究をして行きたく思う。

교보문고 KYOBO Book Centre

참고문헌

秋山公男氏(1992)『様虚集』の基層」『愛知大学文学論叢』愛知大学文学会、p.32。
有山大五(2000)「戦争文学論」一<戦争文学>とその研究辺の一視点」『芸術至上主義文芸』26、芸術至上主義文芸会、p.8。
大岡昇平(1974)「漱石と国家意識－『趣味の遺伝』をめぐって－」『大岡昇平全集』第13巻、央公論社、p. 8。
越智治雄氏(1970)「漱石の初期短編(承前)」『国文学解釈と教材の研究』学灯社、p.28。
金正勲(2010)『漱石と朝鮮』中央大学出版部、p.173。
小宮豊隆(1975)『漱石の芸術』岩波書店、p.62。
斎藤恵子(1973)「『趣味の遺伝』の世界」『比較文学研究』24、東大比較文学会、p.102。
夏目漱石(1979)『漱石全集』第３巻、岩波書店、pp.151-201。
_____(1980)『漱石全集』第37巻、岩波書店、p.282。
_____(1980)『漱石全集』第38巻、岩波書店、p.20。
長谷川天渓(1904)「戦時の文壇」『文芸倶楽部』第10巻16号、p.246。
広津柳浪(1904)「社会主義と際物文学」『文芸倶楽部』第10巻11号、p.194。
平山露花(1904)「所謂戦争文学を排す」『明星』第６号、pp.53-55。
『平民新聞』第14号、1904年２月14日。
『平民新聞』第14号、1904年２月14日。
『平民新聞』第16号、1904年２月28日。

❖ 투고일 : 2011.12.31
❖ 심사일 : 2012.01.27
❖ 심사완료일 : 2012.02.02

교보문고 KYOBO Book Centre